

父が先生、畑が学校だった

我々三兄弟



寺島英治さん (33歳)



寺島 敏さん (30歳)



大河原正雄さん (29歳)



寺島英治さん (33歳)

山形県南陽市砂塚2311-1 ☎0238-47-7584
千葉県旭市神宮寺200 (有寺島農場) ☎0479-64-1978
<http://www.hoshinet.or.jp/tera/>

プロフィール

父の経営する山形県南陽市の経営から独立し、千葉県旭市に兄弟3人の法人経営の有限会社寺島農場を設立。現在は長男で社長の英治さんが父、隆治氏とともに山形に住み有機野菜の生産とオカヒジキの種苗生産をしている。敏さん、正雄さんは千葉に常駐している。寺島農場は全国のオカヒジキの約70%を生産しており、「若芽ひじき」という独自のブランドで販売している。

寺島農場のことを知ったのは、インターネットである。索引で農業の項目を眺めていたら、元気のいい農家のホームページに出くわした。寺島農場のホームページだった。3人の兄弟が山形県南陽市と千葉県旭市の2カ所の農場で経営をしているとあり、生産物の販売案内とともに、家族全員のいかにも楽しそうな暮らしぶりが紹介されていた。

寺島英治さん33歳。寺島家の長男であり、兄弟3人とその妻たちで作る有限会社寺島農場の代表者である。

父、隆治氏の経営から独立した息子たちの法人経営の農場は千葉県旭市にある。そこでは、「オカヒジキ(同社の商品名では「若芽ひじき)」という野菜の生産と販売をしており、農場の実務は次男の敏・恭子さん夫婦と三男の正雄・百合さん夫妻が千葉に常駐して担当している。三男の正雄さんは、奥さんの実家に婿入りして大河原姓を名づけているが寺島農場で仕事をしている。社長の英治さんは、農場の立ち上げをした後、夫婦で山形の実家に戻り、父隆治氏(59歳)とともに野菜作とオカヒジキの種苗生産をしている。

山形の個人農園は、隆治氏が33歳の時に開墾して作った標高700mの山の上にある15haの畑での野菜作りが経営の中心。また、千葉の法人農場に販売するオカヒジキの種苗生産も行っている。

案内された畑は文字通りの山の中だった。南陽市の市内から離れて細い一般道を走り、さらに四輪駆動の車でもひっくり返りそうな林道を8kmも山に分け入った、峠のような場所に畑は拓かれていた。

千葉でオカヒジキを始める前には、そこで20人以上のパート主婦を集めて、1日に4トトラックで4台分もダイコンやハクサイを収穫したこともあったという。現在では両親と英治さん夫婦の家族労力でこなせる面積にしている。なにしろ山の中なので、人を頼むとなれば朝夕のパートの送迎時間だけでも一仕事で、中途半端な面積ならむしろ家族でやれる範囲にした方が経営の効率が良いからだ。

今年の栽培面積は、ハクサイを3ha、オカヒジキの種子採取畑が2ha程度。全部で15haある山の畑はほとんど遊ばせている。

ところで、寺島さんの畑を見た時、その草の多さに驚いた。しかし、それには理由があった。

以前、放棄していた雑草だらけになった畑に改めて作付けをしてみると素晴らしい出来だった。手が回らなく草を生やした結果、雑草が土壌を蘇らせていたのだ。しかも、取り切れない草の間に育つ野菜は健康で農薬を使わなくても病気や虫が減るのだった。その体験を通して英治さんはマルチも止めてしまった。草を生やすためだ。草はプラウをかければなんとかなる。まったく農薬を使用していないというハクサイ畑を見たが、草の中でハクサイは立派に育っているし、確かに虫や病気の障害が少ない。

英治さんの野菜は、堆肥を使い、一部の畑では農薬もまったく使わない無農薬有機栽培であり、それを契約先に出荷しているのだ。

一方、千葉の法人農場では15haのビニ

ールハウスに通年でオカヒジキを栽培している。これも完全無農薬で化学肥料も使わない。こちらでは収穫調整の手間がかかるため常時パートを雇っている。

全国生産量の70%を作るオカヒジキ

オカヒジキは、もともと海岸の砂丘などに自生する1年草の野草で、長さ2〜6cmの細い円柱状で多肉質の葉を付け、その柔らかく濃い緑の若葉を食べる。独特の風味があり、酢味噌合えやお浸しなどにして食べられてきたが、最近ではサラダや各種の調理法も開発されている。隆治氏は、このオカヒジキを通年で生産できる作物として栽培技術の開発に取り組んできた人なのである。また、生産組合を作り南陽市での産地化の先頭に立ててきた。隆治氏の活動によって一時期は生産者も増えたが、生産量が増すにつれて価格も下がり、ほとんどの人が止めてしまった。

かつては、オカヒジキ生産組合の中心人物であったが、千葉の農場が本格的に稼働するようになってからは、「若芽ひじき」というブランドを付けて寺島農場独自で販売するようになっていく。

独自ブランドを作ったのには、九州や静岡などでも栽培が始まり、肥料や農薬を使うために食味などに誤った認識が広がるのを恐れ、差別化をはかる必要が出てきたこともある。現在、同農場の生産量で全国の70%程度を占めるのではないかといい。

英治さんたちが千葉への進出を考えたのも、オカヒジキの消費拡大が目的だった。父、隆治氏が精根をかけて開発してきたオカヒジキがこのまますたれていってしまうことを惜しいと考えたからだ。生産量の低迷は、販売努力の不足と生産意欲の問題だと思えた。種子生産から栽培、市場開拓、販売までを自らの手で総合的にやればもつと販売量も利益も増えるはずだと考えた。そんな頃、隆治氏の古くからの友人が千葉でのオカヒジキ作りを勧めた。

千葉であれば通年で栽培ができるし、大きな市場を控えている。しかし、産地作りには力を注いできた本人である隆治氏が、自分自身でそれを始めるには村のしがらみが足かせとなっていた。

千葉からの誘いの話を隆治氏から聞いた英治さんは、二つ返事で「我々にやらせて」と頼みこんだ。

千葉農場の開設と法人化へ

平成4年の11月だった。隆治氏の友人からの紹介を得て、12月には英治さんが単身で、さらに翌1月には妻の清美さんも千葉に移り住んだ。まず、借りる土地探しからの農場開設だった。お金があるわけでもない。行ってしまうばなんとかなるといふ思いだった。千葉行きを勧めてくれた父の友人が土地を借りる段取りを付けてくれた。しかし、移住して1年間はほとんど収入もなく、夫婦で「今月はお金があと500円しかないよ」なんていいながら近所の農家から野菜を買っ

て食べたりもした。新婚の二人にはそれも楽しかった。そして、平成5年の秋には敏さんと奥さんが、正雄さん夫妻が相次いで千葉に移住してきた。さらに年が明けて千葉の農場を法人登記し、有限会社寺島農場が発足した。

土地は借地。資本金と最初の運転資金も銀行から500万円を融資してもらって工面したものだ。それも今年で返済を済ませた。英治さんにいわせると「地元では気遣い扱いで」という千葉農場開設の事業に千葉の銀行が興味を示し、融資してくれたのだ。それと同時に、千葉の引き受け役になってくれた人達、千葉県旭市の農水産課も親身になって相談に乗ってくれた。千葉進出を勧めてくれた人の後ろ盾もあった。

有限会社寺島農場の立ち上げを済まして、英治さん夫婦は山形に戻った。まだまだ投資段階にある事業資金を得るためにも山形での野菜作りの仕事も伸ばさなければならぬからだ。

英治さんたちにとつての千葉農場の開設や農業の法人化の経験は、農業でも地域を越えた事業展開が可能であることを実感させたし、そのことが彼らに新たな自信や可能性を与えてくれた。さらに英治さんは、将来、北海道に農場を持って麦や大豆を作り、こだわりの味噌加工もやってみたいとも考えている。

親の生き様で子供は育つ

こんな英治さんたちのチャレンジ精神はどうして育ったのか。

寺島家の3人の兄弟にとっては、畑が学校、父が先生だったのではないかと。寺島家の子供たちは、小学生の頃から農作業を手伝うのは当然だと思っただ。敏さんは「子供だからといって何もせずに飯を食べるなんてこと許されな」と思っていました」と話す。

両親は、朝の4時頃から仕事をし、夜中まで大根を洗っている。当然のように家の仕事を手伝っていた。中学に入ればもう一人前にパートのオバサン達を仕切っていた。

農業高校に進んだ英治さんは、度々学校を休んで家の仕事を手伝っていた。勉強もあまり好きではなかったけど、今でもそれで良かったと思っっている。学校の先生は何度も「君の本分は学校で勉強することだ」と英治さんに説教をしたが、彼は家で仕事をすることこそが農業の勉強だと確信していて、「農業高校なら、むしろ生徒を我が家を実習に來させるべきだと思っただ」と笑う。

「親父はおつかなかった。腕白坊主のように夢を見て、それに向けて突っ走る。

そして、いつも飲み歩いているのに絶対服従でね。でも、それで良いのだと思っます」

高校を卒業して25年。息子たちの世代になり、自分たちの夢のために邁進しながら親にもなった英治さんの実感なのはなかるうか。

返済せねばならない借金も多いし、仕事も大変だ。もっと楽な暮らし方も出来るかもしれないが、それではつまらない。経済を含めてもっと大きな夢の実現のために若い夫婦が、家族や仲間と苦労を共にしながらチャレンジしていく。その姿を見て子供たちが育っていく。子供にとってそんな素晴らしい人生の体験を与えられる教育が他にあるのだろうか。

ただ隆治氏は、彼自身の農家としての夢を実現しようと邁進してきただけなのではないだろうか。もし、息子たちに受け継がせたいもの、伝えたいものがあつたとするなら、それは隆治氏自身の生き方であり人生そのものではないだろうか。

そして、その隆治氏の生き方、家族の暮らしが、3人の兄弟を農業へと向かわせた。あえて困難と思える道を歩もうとさせた。子供たち3人が学んできた人生の学校とは、父の畑であり、今、自分たちで築き上げようとしている有限会社寺島農場なのである。そして、父親が、母親が、そして仕事の中で出会う人々こそが真の先生だったのだ。



上：虫除けのためにハウスは必要だ。
 おかひじきは、虫も大好きだ。
 左下：山形にある、種をとるための畑。
 右下：寺島ブランドの出荷箱

学校教育で与えられる知識や体験が不要だなどというわけではない。そもそも子供を育てるとは、一人の人間として恥ずかしくなく飯が喰えるようにさせること、そして夢を見ることを伝えることなどではないか。むしろ、世の多くの親たちは、自らの人生にも自信を持ってないまま、自分自身の生き様では何も子供に伝えることができないでいる。今ある与えられた価値基準に従って学校に入れ、塾に通わせることしかできぬ親たちからすれば、寺島農場、寺島一家の存在は憧れかもしれない。

しかし、こんな3人の息子たちを後継者として持った隆治氏は、特別に農業後継者を育てようなんて思っってきたわけではあるまい。

息子たちは自分たちで伴侶を見つけ、結ばれた。その妻たちも、資本もなく新たな事業に取り組むことでの経済的困難を承知の上で結婚を望み、今、全員で泥まみれになりながら未来を築こうとしている。そして、それぞれの夫婦が子供を持ち、今度は息子たち夫婦が、彼らの親がそうであったように、彼ら自身が生き方において子供たちを育てようとしているのだ。

「農業は儲からないから継ぐ者がいない」だから農家にはお嫁さんが来ない」などという人がいる。

しかし、寺島家の人々をみて、その人たちは何というのだろうか。そして、その人たちは子供に何を継がせようというのであろうか。果たして儲からないから子供たちは農業を継がないのか。農業の仕事が大変だから農家には「お嫁さん」が来ないのだろうか。 (昆 吉則)